

令和2年6月3日

臨時スクールカウンセラーだより⑥

日野市立平山小学校

校長 長崎 将幸

スクールカウンセラー 出川美樹子

古川 幸

こんにちは。子供たちの声が学校に戻ってきました。先生方も授業をされる姿が生き生きしていらっしゃいます。ところで、授業を見ていると、クラスの人数半分ずつの教室の「距離感」も子供たちにはいいのではないかと感じたりします。その距離のせいだけではないかもしれませんが、何となく落ち着いているように見えるのです。元に戻ると近すぎて、安心できる距離が取れないということがあるのかもしれない。そこでソーシャルディスタンス、この際、しっかり考えてみたいと思います。

パーソナルスペース

社会心理学には、もともと「パーソナルスペース」という考え方がありました。他人との距離がどのくらい離れていると心地よいか、それとも不快か、実験をしてだいたい分かっています。

アメリカの文化人類学者、エドワード・ホールによれば、次のように別れます。

- ① 密接距離(0～45 cm)⇒家族やごく親しい人は、自分とこの距離にいても安心、むしろその方が安心です。それ以外の方がこの距離まで近づくと抵抗感があり、とても不快です。
- ② 個体距離(45～120 cm)⇒お互いが手を伸ばせば触れられる距離で、表情もよく分かります。割と親しい友人・知人とのプライベートに会話する時などの距離です。
- ③ 社会距離(120～350 cm)⇒直訳すると「ソーシャルディスタンス」ですね。体に触れることができない距離で、公的な改まった場や文字通りあまり近しくない人とはこのくらい離れていることが多いでしょう。
- ④ 公衆距離(350 cm以上)⇒例えば、講師と受講生、集会の時の壇上の校長先生と児童というような場での対面する時の距離です。一般には気持ちの距離も遠いのですが、条件によっては「一体感」みたいなものを感じられることがありますね。

さて、何かお気づきでしょうか。いわゆる『密』な関係の人や、ある程度心を許した人ならば①や②が自然です。それが心地よい・安心・安定するのですが、今は、自分の気持ちに関わらず③でいることを求められています。その結果、気持ちが不安定になったり、寂しく感じたり、いらいらしたり…ということにもつながるかもしれません。とても不自然なことをしながら、皆の命を守るために私たちは耐えているんですね。それでも何とか工夫して…シート、マスク、シールド、ウエブ、消毒・殺菌剤等々を使って、何とか近づいて心を満たそうとしている、ということかなと思います。もう一つ…子供たちの普段の教室の距離、今のゆったりした状態を続けることは難しいですから、近すぎることで子供の心に起きることに配慮するのも大事なかなと思います。(古川)